

煙
洲
殘
筆

煙洲 鈴木達治著

煙
洲
殘
筆

米壽をお祝いして

煙洲 鈴木達治先生 に捧ぐ

横浜工業会

県立商工高校同窓会

昭和三十三年
七月五日

横浜工専会

蔵前工業会有志

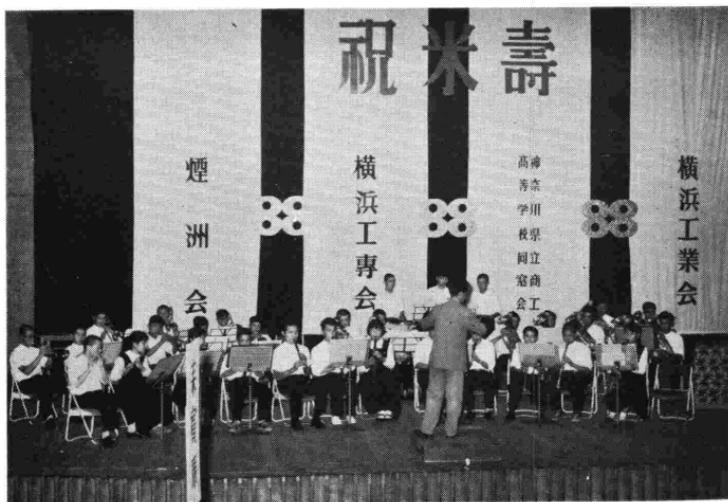
煙洲会



米寿祝賀式当日の煙洲先生（1958年7月5日）



祝賀式のプログラム（工専会神村君の司会）



祝典序楽（母校グリークラブ・商工高校・工業工高学生）

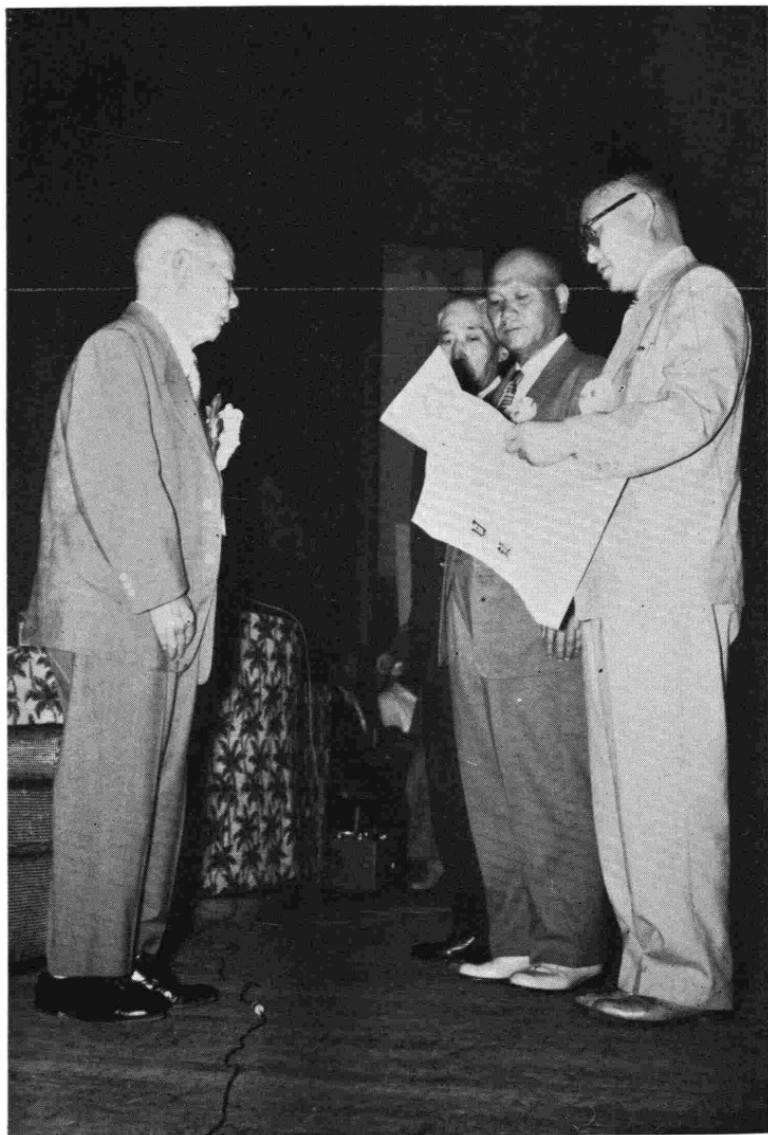
祝米壽

横浜工專会

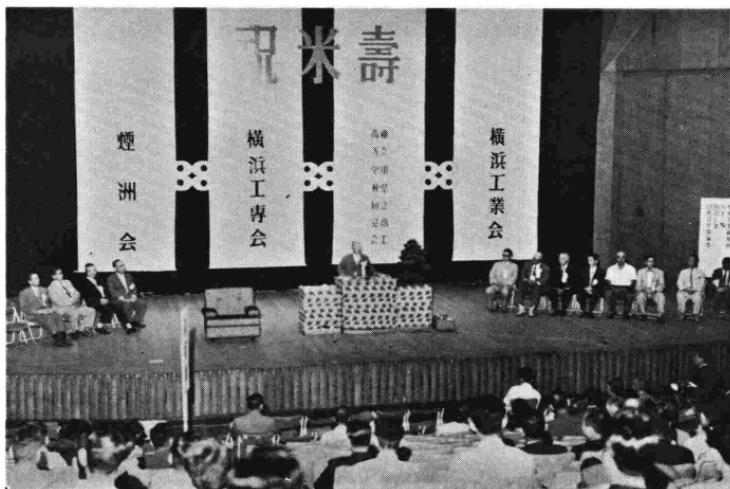
高神
等奈
学川
校県
同



“先生お芽出度うございます”



記念品贈呈（工業会山口君・商工同窓会大須賀君・工専会遠山君）

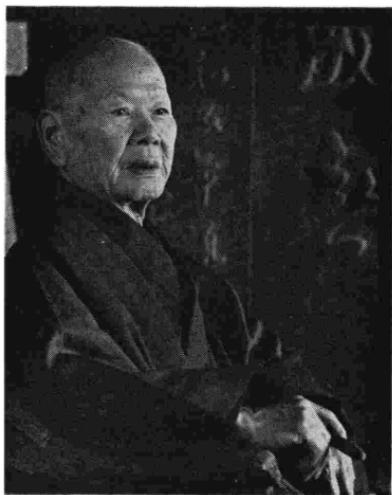
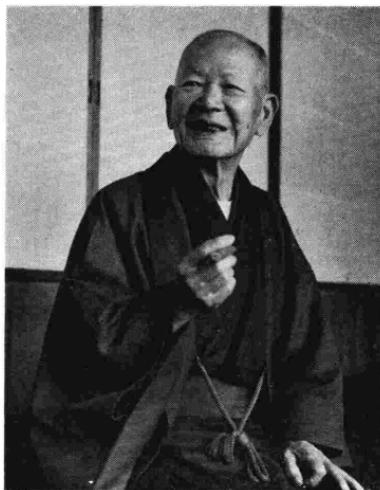


先生ととかれる 諄



先生万歳！（ニューグランド祝宴会場）

先生の閑居姿



序
文

序

一昨年「三十二年」十二月の始め、私が懇意の理髪屋に出かけた時、床やの者が「先生のこと新聞にのつていますよ」と告げた。

私はその日刊新聞（日本経済新聞）を見せてもらつたら「私の履歴」と題する東洋高庄社長石毛郁治氏の随筆だつた。二十日間にわたる長い随筆であつて、その中で石毛氏が若い時代を藏前の高工で過した事を語つており、その時代に教授をしておつた私の事を書かれていたのであつた。

私はその新聞全部を持帰つて読んだところ非常に興味を感じたので、自分もこれにならつてその経歴を書いてみようと思ふ感じをおこしたのである。

翌春になつて筆をとつて書始めたところが少し健康を害したためか容易にはかどらない。そこで、教え子の横浜市立工業高等学校の長谷川光次氏に相談して、私の口述を筆記してもらふことになつた。

それから、一週二回づゝ工業高等学校に通つては三十分内外の口述をやるようになり、

連続して四月までつゞけた。この間にだん／＼私の健康も勝れなくなつてきて通うのにたえられなくなつたので、これを中止し、それに口述もほゞ終つたので、原稿の整理を長谷川君に託して一たんこれを打切つた。それから後は、工業会の幹事長山口辰男君に託し、一本にまとめる役をひきうけてもらつた。

今にして考えてみると、未だつけ添える事もかなりあるのを見出しすこぶる残念にも思うが、もはや及ばないことである。それにしても私の不完全な原稿をよく連絡して一冊の単行本となし、その上に私の関係した学校の出身者の原稿まで集め、これを完成してくれた事は、全く山口君の熱意と努力によるもので、深く感謝しているところである。

私の健康状態は四月以来今日に至るまで、とくに良くもならず、それかといつて悪くもならずで、朝夕病床にあります。私の米寿にさいし、出身者諸君より多大の祝意を頂戴した事にたいし、又本書の刊行にさいして、多大の御同情を頂いた事を心より感謝いたしておりますが、これを思う様に披瀝する事の出来ないのを遺憾としていきます。

只々御礼を申上ぐるのみにて巻頭にかゝぐる序文にいたします。

昭和三十四年一月

煙 洲（口述）

先生を稱える

煙洲先生を称える

—— 煙洲先生の米寿祝賀会に参列して ——

鈴 木 京 平

煙洲先生が、御壯健で、米寿を迎えられたことは、平素、先生を敬慕している私共として、ほんとに嬉しく、この度、特にその祝賀の盛儀を催された三校御出身の諸君に対し、私は深く敬意を表すると共に、親しくお祝いの言葉を申上げる光榮に浴したことは誠に感激にたえないことであつた。

先生が、非凡の御識見を以て異色ある教育活動を自主積極的に実行され、我が教育文化に大きな貢献をされたことは、世間周知の事実で、今更、こゝに贅言の要もあるまいが、数十年來、特に因縁浅からぬ先生と私との間柄で、時に生じた事件の顛末を二、三敘述することは、先生のお人柄を極めて明瞭に理解する上に、大いに役立つことと思う。一口にいえば、私が、教育者という聖職に一生を捧げ得たのは、全く、煙洲先生の偉大な感化力の賜である

と信じて疑わないということである。

×

先生とは、もと師弟の關係にあつたが、後に、先生が、藏前高工の応用化学科長で、私が同校の助教授時代の或る日のこと、科長室で先生から、『君は文部省留学生として二ヶ年間に在外研究が許可されることになつた。まことに目出度い』とお話があつた。これに対し、私は在外期間を是非とも三ヶ年にして欲しい、と強く要望した。それというのは当時、藏前高工は、一橋高商と同様に大学昇格の問題があり、私としては、自分の専門の學術の研究だけでなく、有名な英国の大学教育の實際を、学生として身を以て具さに体験し、後の教育上の参考に資したいという若い欲望にかられていたからである。

私は種々理屈を並べて、容易に譲ろうとしない。そこで先生も困られたか『君の他に大学から来た助教授がまだ二人いる。君が早く帰つてもらわぬと後がつかえる』といわれた。これに対して私は『それなら、その方たちを先にやつて下さい。私は、一番最後に、ゆつくりやつて頂きましょう。』と、喰い下ること約一時間。

これには、大ていの上司なら、到底我慢できまいと思う。後年、私は、校長、学長という

責任ある地位についた時に、あの当時の我儘な私自身を追想して、冷汗三斗の思いをするこ
としばくであつた。私は当然、先生からのお叱りを予期した。然し先生の態度は、何時も
と少しも変らない。微笑の中に『君は仲々強情な男だね、全く珍しい。こんな人は始めてだ
ね』と、暫時、私の顔をみつめておられたが、やがて、『だが然し、君の様な若いものから
見たら、僕は頑迷固陋で、わからずやのおやじに思えるかね。宜しい。君の言分にも理由が
ある。それでは文部省に行つて掛合つてみるから二、三日待て』と申された。これには、人
並はずれた我儘者の私も早や、返えず言葉を知らず、今迄の張り詰めた勢いは何処へやら、
暫し黙然として、自己の非礼が反省されると同時に、自然と心の底から『このおやじは偉い
なあ、只者ではないなあ』とたゞ、感嘆の叫びが湧き出るのを覚えるのみであつた。

それから一週間後に、科長室に呼ばれて、『君はまことに好運児だ。文部省は君の希望を
容れてくれた。安心して行つて来たまえ』と激励して下さつた時は、私はお礼の言葉より先
に、眼頭の熱くなるのを覚えたのであつた。

×

それから三年後、私が帰朝した時には、先生はすでに横浜高等工業学校創立校長として迎

えられており、私は蔵前の教授となつたが、大学昇格も見透しも漸くついた際に、蔵前の校舎はかの関東大震災で全焼した。

その復興や、大学準備の施設の問題に關して、学校幹部と、若くて、向意気の強い洋行歸えりの新進氣鋭を誇る教授連との間が常に意見が合わず、無慙にも、私達三人の若い教授が一度に、文官分限令第十一条第四項によりバッサリと鹹首された。

然し世の中は、殺す神あれば助ける神ありとか、私は人々の情で海外に遊び、一年後に歸国すると、煙洲先生から、横浜の学校に是非手伝いに來いとお話である。実はその時、已に私は某大会社の社長との間に、その会社に入社を約束してあつたのだが、敬慕する先生からのお招きであつたので、そんなことを忘れたかの様に、直ぐに横浜の学校にきてしまつたのである。

×

さてその当時、教育界における私に關する批判は『鈴木京平は再び教育界には戻れまい。あんな人間を部下に持てば常に爆弾を抱えている様なものだ。横浜高工の校長は実に物好きな男だ。あんな爆弾見たようなものを、よくも連れていつたものだ』と噂されていたとのこ

とである。然し世間で、それほど警戒された爆弾も煙洲先生の膝下にあつては、不発弾となつて、私は昼間の横浜高工と、夜間の横浜工業専修学校の二校に関係することになり、特に先生の御諒解の下に、朝は十時出勤、その代り夜は十時まで、毎日十二時間勤務を、例の煙洲先生流の『昼は自分が校長だが、夜間は君が校長の積りで思う存分勝手にやり給え』の至極寛大のお言葉に励まされて、満十五年間、私の教育者生活の三分の一を、最も力の入つた最も愉快な教育活動に過すことができたのである。

×

その後、先生の膝下を離れてから東京高等工芸学校長在任中、第二次大戦の最中のことである。私はある軍需品関係の方面から、当時の文部省直轄学校長の十倍もの待遇で勧誘を受けた。私もこれには心動くものがあつて、これを文部次官に申出たところ、文部当局もすでにそのことは知つているが、文部省は、待遇ではとても実業界と、競争はできないので実は困惑しているとのことであつた。そこで私は試みに煙洲先生の意見を叩いてみたところ、先生は『それはまことに結構、そんな待遇は何処にもあるまい。僕がかれこれいう権利もない。君の自由意志で決めるべきだ』と言われた。かと思つと更に語をつかれて『だが、君

も教育界の一部では評判男であり、その後の業績も、相当認められている人間だが、鈴木も矢張り金のためには動かされて、遂に節を折つたかと言われては、実に世道人心に影響するところ決して少くないね』との御託宜に、私ももう、そのあとは聞かずもがなと、その旨を直ちに文部次官に伝えて安心させたことがある。

先生の、私に対する仕打は、何時も、概ねこの調子であるが、これに対して、私自身、何等反感を抱くことがないのも不思議である。

かくて世間で警戒された爆弾の一生も、先生のお蔭で、何時も平和のために利用されたのは、誠に幸福というべきである。

なお、煙洲先生在任当時の横浜高工の教授陣容は、多士済々で、中には爆弾勇士とおぼしき連中も数人おつたと思うが、その原動力は何れも平和な文教活動に利用され、そのため、校内に自然に譲し出される生気潑潑たる雰囲気の中にあつて一部の人士には、その成果が危まれる位の、当時としては、尖端を行く所謂自由教育が活潑に行われ、一種、特色ある校風を見るに至つた。

×

抑々も煙洲先生の教育思想は、『名教は自然なり』の高邁な信念に発し、生徒各自が、自覚の下に、その天賦の能力を自発的に自由に啓発し得るように仕向けることを理想とし、人為的に無理せぬよう、遂に無賞、無罰、無採点の三無主義の実行となつたのである。

先生は寛容の人であると同時に、真に気骨の人である。『我が校は、官立ではあるが、私は、私立学校の積りで生徒の教育を運営する』と校の内外に宣言されて徒らに世評に感うことなく、毅然として、その教育理想の実現に邁進された。近頃の、教育界の一部の人士に見受ける様な、所謂、世論に阿ねる学説を吐くとか、権力の干渉を恐れて、故意に之れに反抗するなどということなく、常に、平然として忠実にその所信に従つて邁進された姿は、寧ろ雄々しいものがあつた。

実業教育に関しては、また、一見識を有して、官立の高工と県立の商業および工業を併設した商工実習学校と、更に市立の勤労青年を收容する工業専修学校との三種類の教育の必要を称え、自ら三校に校長として、三体一心の教育を実施し、更に、学校教育の成果を挙げるためには、その背後の社会教育の重要性を強調し、横浜高工を中心とする工業懇話会を設けて、横浜市内外の指導層に産業知識の啓発、普及に大いに力を入れ、或は大陸会を設けて海

外発展の鼓吹に奔走されたものである。

×

私が私淑する明治時代の代表的教育家、新島襄、福沢諭吉、大隈重信、新戸辺稲造、手島精一の諸先生は、何れも特徴のある偉大な教育家で、その感化力は強大であった。私は煙洲先生に接する度に、何時も、先生を通じて、これ等教育界の偉人達の面影が、自然に偲ばれる様な一種の魅力を感じる。誠に先生は偉大な教育者であると思う。

然し自らはこれを誇るでもなく、世間も亦、その功績に酬ゆること極めて薄い。斯く申す私自身また、多年の恩顧に対し、これという報恩の出来ないのは甚だ慚愧に堪えない。

然し先生が、門下生に及ぼす強大な感化のエネルギーは、更に次代から次代へと、永遠に不滅で、常に社会の各方面において、人類文化の創造発展に貢献を続けるわけであるから、希くは先生には、益々自重、自愛されて、愈々長寿を保たれ、多数の子弟が敬慕のシムボルとして、不知不識の間に長く、その感化激励の原動力となられんことを、私は神に祈つて止まぬものである。

目
次

序

先生を称える

一章 志学・而立・不惑

同志社に学ぶ

熊本時代

東京帝大理科大学時代

仙台第二高等学校教授時代

広島高師時代

独乙留学

二章 藏前時代

空中窒素固定

甜菜糖

塩の専売廃止論

朝鮮電気工業株式会社の設立

一頁

三頁

十四頁

十八頁

二十一頁

二十五頁

二十八頁

三十一頁

三十三頁

四十七頁

五十二頁

五十四頁

蒙古天然曹達の探險

五十九頁

日本カーボン会社の設立

六十五頁

三菱鉛筆会社

六十七頁

松尾鋳業株式会社

七十頁

舎密研究所

七十三頁

人造絹糸

七十六頁

三 章 弘陵時代

横浜高工と三無主義

八十一頁

無試験主義と無採点主義

九十頁

無賞罰主義

九十四頁

忠君論と憲法論

百 頁

思想問題

百二頁

県立商工高等学校

百四頁

市立横浜工業高等学校

百九頁

横浜工業懇話会

百十一頁

大正十二年大震災

百十三頁

学校と火災

百二十一頁

建築学科の思出

百二十五頁

互助主義「十銭会」

百三十頁

大陸会

百三十二頁

玉川堂の招致

百三十四頁

学位論文の統出

百三十五頁

卒業式

百四十二頁

青年学校令と永田鉄山との交渉

百四十四頁

退官の心境を語る

百四十八頁

四 章 戦中戦後

必勝懇談会と首相官邸襲撃事件

百五十九頁

皇立自然科学研究所の計画事件

百七十頁

別れの言葉

百七十四頁

五章 教え児たちは称える

百八十七頁

秋思

百八十九頁

はいからな古武士

百九十八頁

吾れらの太陽

二百二頁

無題

二百六頁

鈴木煙洲先生

二百七頁

私の南洋留学

二百十頁

鈴木先生在職当時の思い出

二百十七頁

ある頃

二百十九頁

前を通つた一学生に過ぎないのですが

二百二十一頁

鈴木達治先生の蔵前時代

三百二十三頁

母校の有難さ

二百二十六頁

そこはかとなく

二百二十七頁

煙洲先生と草創期の建築科

二百三十四頁

鈴木先生への傾斜

二百三十六頁

煙洲先生の一片鱗

二百三十九頁

自由啓発の影響

二百四十四頁

最近の父を語る

二百四十九頁

煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会の記

二百五十二頁

編集後記